Ⅲ-2

特集 進化する糖尿病治療！～話題の新薬と治療法～

Ⅲ．高齢者

高齢者糖尿病とフレイル

芳野　弘，弘世貴久
東邦大学 医学部 内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌学分野

我が国は2015年の時点で65歳以上人口が3277万人，高齢化率は26.0 %となり高齢化比率が上昇している．高齢者糖尿病患者の人口動態に関しては，2013年の国民・栄養調査では糖尿病患者においては70歳以上で男性は24.4 %，女性で17.6 %と非常に多く，高齢化という視点からも糖尿病診療は非常に重要になると考えられる．近年我が国では加齢とともに日常生活動作（Activities of daily living；ADL）が低下し，「高齢による衰弱」となる「フレイル」がクローズアップされてきた．糖尿病患者は非糖尿病者に比べ，ADLが低下し，転倒のリスクが高く，比較的早期にフレイルに至らしめる可能性がある．本稿では高齢者糖尿病におけるフレイルとの関連性について早期介入，予防の観点も含めて述べていく．

はじめに

我が国の人口動態であるが，2005年をピークに人口は減少に転じ，2050年には1億人を切り，1965年ごろに戻るが，当時と異なるのは高齢者比率である．

戦後生まれのいわゆる「団塊の世代（1947（昭和22）～1949（昭和24）年生まれ）」が65歳以上となる2015年は，65歳以上人口が3277万人，高齢化率は26.0 %，75歳以上人口が1574万人，後期高齢化率は12.5 %となる見通しである．2025年に75歳以上は16.7 %（6人に1人），65歳以上は28.7 %（3人に1人）と増加していくと予想される．今後しばらくは世界でみても我が国が高齢化比率でトップのまま続くことになり，人類史上例をみない状態になる（図1）．

高齢者糖尿病患者の人口動態に関しては，2013年の国民・栄養調査では糖尿病患者においては70歳以上で男性は24.4 %，女性で17.6 %と非常に多く（図2），高齢化という視点からも糖尿病診療は非常に重要になると考えられる．フレイルについては，老年医学的には加齢とともに日常生活動作（Activities of daily living；ADL）が低下し，「高齢による衰弱」は一般的に使用されているfrailty（フレイルティ）の定義と類似したものであり，後期高齢者の要介護状態に至る要因の最重要因子である．今後の超高齢社会を持続可能な社会として実現するためには，ADLが低下した要介護状態に至る時期を少しでも先延ばしにして健康寿命を延長させる必要がある．2014年6月に日本老年医学会フレイルワーキンググループでは今後，「フレイル」という呼称を使用することが決められた．本稿では糖尿病とフレイルの関連について解説していく．

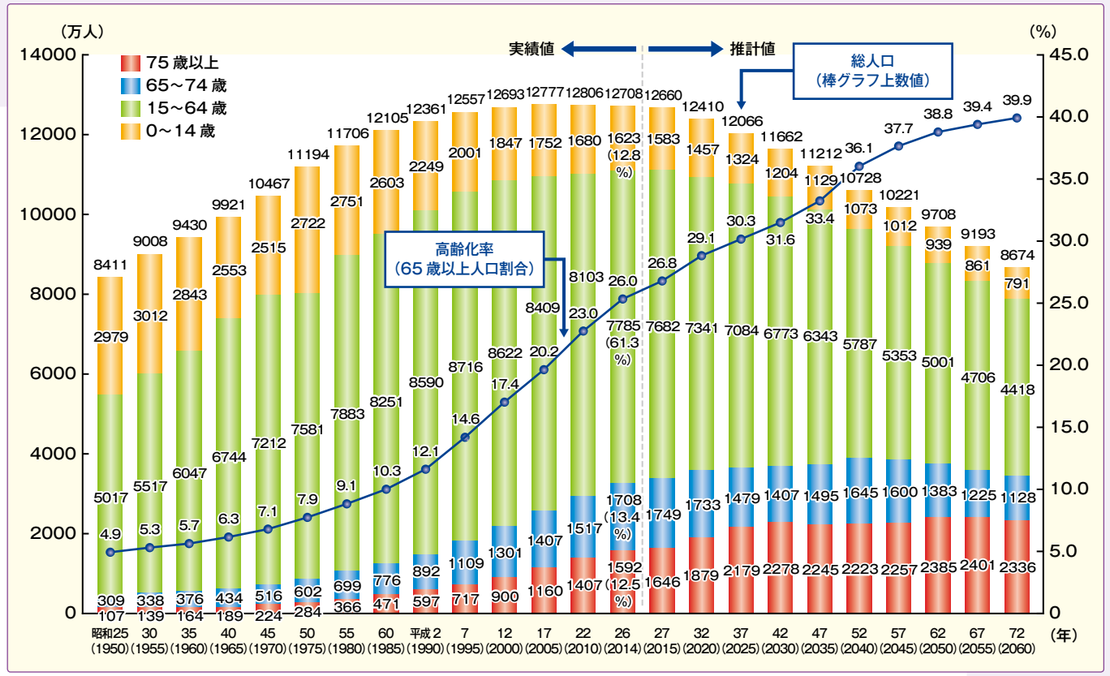

図1 高齢化の推移と将来推計（文献1）
資料：2010年までは総務省「国勢調査」，2014年は総務省「人口推計」（平成26年10月1日現在），
2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果
（注）1950～2010年の総数は年齢不詳を含む．高齢化率の算出には分母から年齢不詳を除いている．

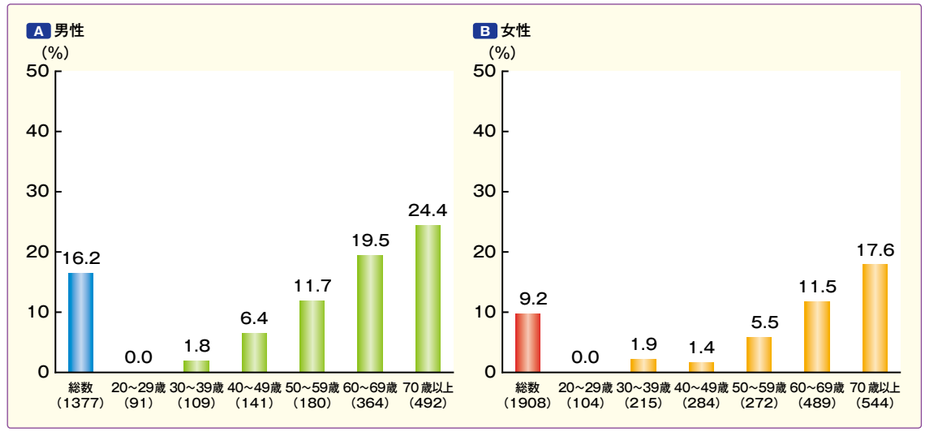

図2 「糖尿病が強く疑われる者」の割合（20歳以上，性・年齢階級別）（文献2）